
1442

椎名もと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

1442

【Nコード】

N6679D

【作者名】

椎名もと

【あらすじ】

無駄に好奇心旺盛なマチコは時を超えられる機械、所謂「タイムマシン」が完成されたという某有名学者の研究室に乗り込む。いい具合に侵入しマシンが置いてある一室までたどり着いたのだが・・・

「何処だ。」

「何処だ」

と言った先に見えたのは城をバックにした銀髪とちょんまげだった。ここが何処なのを理解できるまで少し時間がかかった。

・・・あの時も少し落ち着けばよかったなあ・・・

。

やはり帰らなければ、と思って振り向けばこの世の物とは思えない速さで次元空間が逃げていくのが見えた。笑顔が凍りついた。帰れなくなってしまったのだ。

吸い込まれることを期待して、空間があつた場所に石を投げてみる。

石はストンと乾いた地面に落ち転がっていった。

数時間前。

中学生のミチ・マチコ（ありきたり）は某有名学者の研究室に忍び込んでいた。

朝の新聞にこの某有名学者が時を移動できる機械、所謂「タイムマシン」を完成させたと発表したからである。父親と母親が共に科学者のマチコは世の中のメディアより先にこの情報を入手していた。無駄に好奇心旺盛なマチコは研究所に（一人で）忍び込む計画を練った。一般人が体験する前に自分が体験してしまおうと考えたらしい。

マチコは頭がよかった為に計画が上手く行った様で、忍び込むところまではすんなり成功した。問題はその後である。

研究室の防犯システムが作動してしまったのだ。忍び込んだのは夜中だったからか、昼よりもシステムが強化されていたからだった。

「やばい」

と思つてからではもう遅かった。警視庁が近かつた所為で数分後には我先にと大量の警察官が建物の中に入ってきたのである。

そこで一つ、ミチコは思いつく。

ソウダ、別ノ時代へ飛ンデイッテシマへ。

急いでスイッチを入れる。そばにあるマニュアル等は無いても同然、触れもせず、何処にいくかわからないままにキーを打ち込む。

「飛ンで行け！」

叫んだ瞬間に体が浮き上がったかと思うと急に眩暈がしそのまま失神してしまった。

目を開けてみれば見たことも無い草原と、大きな城。ふらつく足をしっかり立たせつづやいた。

「何処だ。」と。

「他でもねえ、山城の国だ。」

不可解な金属音が城付近で聞こえたのを畠山義就と政長は聞き逃さなかった。「なんだ」と思つて両者ともに振り返つた先に見えたのはひらひらした布の下から長い足を見せている　外見から言つたら　見たことも無い少女だった。金属音と同じくらい不可解な格好に思わず驚いた義就と政長は、久しぶりにたまたま顔をあわせてしまい口論してしまったのにもかかわらず、顔を見合わせ、少女の下へ二人で恐る恐る寄り添いながら走つた。

「ねえ此処はどこ？」

と先に口を開いたのは少女だった。

「他でもねえ。ちつぽけな山城の国だ。」

義就は答える。少女は顔を顰めた。「知らないなあ」とぼそぼそ言いながら立ち上がった。

「貴様のその格好は何なんだ？」

政長も少女と同じように顔を顰めた。

「おー怖。答えるのめんどくさいからざつと説明するよ。うん。本当にめんどくさい。あたしはマチコ。7月生まれのO型ね。この力ツコはね学校に行く為に着てるいわばユニフォームみたいなもんだよつて見た感じ此処は昔だね？御前さんたちが着ているその服と一緒だよ。ほら、身分によつてきつときているものが違うでしょ？尤も着てるものは相当高価なものみたいだけど。」

一息ついてハツとマチコは気がついた。血液型の発見はもう少し先だった（1900、オーストリアのカール・ラントシュタイナーが発見している。）。

「血液型あ？」

と、義就。案の定だ、とマチコは笑つてしまった。

「いや、つつこむのそこじゃねえだろ。まあよい。珍しいお客みたいだな。城下の細内の言つていた金属音はこれじゃないか？」

「ほう、あそこのおやつさんもたまには本当のことを言うんだな。」

「細内い？」

義就が血液型を尋ねたときと同じ形相で反応した。どうやら異世代からの人間はミチコ以外にもいるらしい。ミチコは吃驚してしまった。それ以上に負けず嫌いの性格から「負けた。先着がいたか」、ということのショックの方が大きかった。

「でも今回は手ぶらだな。ふふん。帰れなくなったとか？」

政長は笑いながら座っているミチコを見下して言った。彼女も負けじと睨み返したがどうにもこうにも勝ち目がなかった。所謂、凶星。

「御前さん言っちゃいけないことを言ったね？」

義就が手を差し伸べてくれたのでそれをつたって立ちながら、冷や汗をかきながらミチコは言った。相手二人は苦笑していた。「ついてきなよ」と政長が言ったので汚れた尻をはたいて大人しくついて行った。

「動きにくいんだけど。」

正直に話してしまえば、あの時どの場所に行こうとも全く考えていなかった。てつきり未来へ飛んでってしまうと思っていたので尚更ここに来たのは吃驚だった。

さて、ミチコ一同は 無論政長と仲の悪い義就は颯爽と消えていった バックにあったでかい城の一番上にいた。

「で、君は適当にそのキーとやらを打ったわけだ。」

ミチコは笑った。

「左様でございます。」

スカートのすそを少しばかり両手で上に上げ、膝を抜きながら軽くクロスをさせた。まるで鹿鳴館で踊っている不慣れた猿みたいだなと思った。

「よく分からないな。君の行動は。その格好も分からない。それより聞きたいのは君のその怪しげな服装のことだったりするわけだ。女なら普通はつば装束か小袖ではないのか？」

「大名様はお察しが悪いのでございますか？」

ミチコはわざと上目線のぷりつとした声で言ってみた。

「たわけ。殺すぞ。」

全くの無意味である。

「あはあは。冗談ですよー。単刀直入にわたし未来、ちょこおーつと先の時代から来たんですよー。」

あの声がダメなら、純粹系で。

「気持ちが悪い。」

いったい何の審査をしているのか。

「つて未来？」

「遅いよ！声より先にそちに反応しろよ。たわし。」

たわしではない。たわけである。

「たわし！？私は茶色いシャリシャリした物体ではない！いったい

君はいつ頃から着たのか？」

「うひゃひゃ。あだ名にぴったり。大体1000年後ぐらいかなあ。」

「たわしの話は本命ではない。」

「何処までもムカつく輩だな！1000年！？大体今が約1450年なんだ。」

盛り上がっていた床が1、4、5、0、という数字で一瞬にして静かになった。

「せ、せん・・・せんよんひゃくごじゅう？」

本来のミチコには変わりなかった。所謂、演技ではないということだ。それなのに、ミチコの声はしわがれてどこか悲しそうに聞こえてしまう。政長は到底困った。

「そんな、な・なか・なかんでもいいだろう。」

たわしならぬかみかみのオンパレードである。

「泣いてるわけじゃあないんだ。少しドライアイの症状が進行していてね。」

ミチコは、あえて口調を変えた。

「ふん。君が泣こうが泣かまいが私には関係ないのだが」

政長の話をさえぎった。俄然、イライラしてくる。

「いや、彼方には相当の責任がある。なんせ未来からの貴重な迷い子を拾ったんだから。」

とうとう政長はため息をついた。

「じゃあ、噂の細内のところでも行ってもらうか。」

そしてぼそりといった。

何かとミチコにはショックな言葉でしかなかった。

本音を言ってしまうば、ここにおいてもらえる、という確信があったからである。

「細内？」

「ああ、君には説明がまだだったかな？まあ行けば分かるさ。案内をするよ。」

ミチコは少しうつむいた。

「その前に少し着替えていつてくれ。」

「は？」

「隣の部屋に用意してあると言っていたからな。くれぐれもここで着替えるのは謹んでくれ。」

そういつて政長は立ち上がり隣の部屋をすーっと開けた。見えたのはつば装束が一着、ちょこんと置いてあるだけだった。

「ものすごく動きにくいんだけど。」

すつと政長を睨んだ。

「そうか、とおく遙か彼方の人間には好まれなかったか。」

クツクツと政長は笑った。

「うるさいなあ！」

「それでも結構いいものを着せたつもりなんだけど。なーんてね。」

「え？ええ？なあに？昔の人間でもなんちゃってなんて使うんだ。」

以外と楽しい、とミチコは思った。ここに来て正解だとも思った。もういつそ此処に此の儘居座ってしま

どこかからミチコ目掛けて小石が飛んできた。

「いたっ」

ほぼ反射的に地面にしゃがんだ。

「どうした？」

政長も反射的に聞いた。

「どうした、じゃないさ。石が飛んできた。痛いな、もう。」

「……すまない。」

「は？」

ミチコは到底驚いた。

「何謝ってんの？」

同時に政長が頭を振る。

「いろいろと理由がある、本当にすまない。細山の家に行きながら話そうか。」

どの時代にもいろいろあんだなー。

そう呑気に思い、ミチコは立ち上がり歩き始めた。

「じゃあなんなんだこれは！！」

「美琴、来客だ。」

「あん？」

さっぱりした屋敷に限って、意外と部屋数が多かったりする。まさにその典型がこの民宿だった。昨日まで人が泊っていた部屋を掃除しながら、美琴は父親の声を聞いた。

「お前のー、友達のー、お偉いさん！」
ああ、

「政長か。」

ため息交じりに声を出した。

あいつが来るときは、ろくな話題もってこねえからな。

「親父、今行く。」

軋む階段を降り、玄関へ。開かれたドアの先には見慣れない少女と立っている幼馴染が立っていた。

「久しぶりだな、美琴。」

聞きたくもない声、なぜこんな輩が幼馴染なのか、と思うことは屡。

「ああ、そのガキは？」

「未来からの客だ。」

「またか。残念だが、部屋はいっぱいばいだ。他をあたってくれないか？」

そうすると、政長が肩に手をまわして声をひそめ、

「お前にしか頼めないんだ。これならいくらでもある。」
と、親指を人差し指を合せ小さな丸を作った。

「ほう、聞きなれた金額じゃあ受け付けないぜ。」

そういつて、両者ともにやけながらミチコをチラ見した。

ミチコは気分が悪かった。

「御前ら、何もかも金で片付くと思うなよ。」

ぐおっ

「思っではない。ただおまえのことを考えて
政長のむこうずねにローキックが入る。」

「じゃあなんなんだよ！このサインは！！」

ミチコも同じように小さな丸を作る。

「なかなかいい足技だね！君、見込みあるよ。」

「うつるさいな！もう！今はこっちの話してんのよ！」

さらに丸を前に突き出し強調する。

「気荒な女の子は嫌われるよ。全く。とりあえずは、ここに居させてあげるから。ね、だから落ち着こう。」

息の荒いミチコに、美琴はそういった。動きにくい服装でよく動けるもんだ、そう確認した後、ミチコの腕をつかみ強引に中へと押し入れた。

「てんめっ！何すんだよっ」

「だから、ここにいたいんでしょ？」

「別にいたいわけじゃないし！帰れなくなちゃったの！」

問答無用、といいながら階段の奥へ消えていった。

「じゃあ、すみません椎さん。よろしく願います。」

「いや、遠慮することないだよ。ここは人を匿ってやるとこけえ。きにすんなや。」

ほんとにいい家族だな。俺と違って。

政長はしみじみ思いながら宿を後にした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6679d/>

1442

2010年10月9日05時18分発行